

# 言語表現と理解

— 意味論的考察 —

両角克夫

## I 経験と伝達

人類は自らの生存を維持し拡大するために世代から世代へと多様な経験を伝えて来た。伝承なくして文化は考えられない。この伝承に於て最も大切な媒介の機能を果して来たものは言語である。言語がどのようにして発生して来たかは困難な問題であるが、言語の発達とともに、人類の思考力と記憶の拡大が促進されて来たことは明白である。

言語は概念の記号体系として思索と伝達の medium である。言語活動を社会の場に於て考えるならば、それは情報の交換を目的とする行為であって、対話に於てこそ言語の本体を見ることが出来る。思索や独語は“私との対話”と解される。

伝達が拡大されるためには、その形式は集団に於て通用する共通の約束 (convention) を必要とする。これは後天的なものであって、学習によって獲得される複雑な諸規定である。話し手、書き手の側から考えるならば、言語活動とは、主体の表象、判断、意志などの意識内容、即ち意味を相手に理解してもらうために一定の概念記号の体系にのせて表現と伝達を試みることである。言語学はかゝる言語体験の反省から出発するのであって、出来上がった ergon としての言語の構造分析や、そのメカニズムと機能の記述も、主体的な言語体験を基盤としてのみ可能である。

我々の言語学習の出発は模倣である。幼児は大人の言語行為を模倣することによって母国語を学び、やがて自己の意志内容を他に伝達出来るようになると同時に、他人の言語を自己の言語体験の類推によって追体験し、自分なりに理解出来るようになる。しかし、理解は主体の体験と類推能力の限界内に留ることは勿論である。たゞ、情報の交換によって他人の体験を追体験し、自らの視野を拡大していくことは出来る。それは人間生活の連帯性を強め、社会生活をさゝえる基本的認識を形成する。経験の相互伝達によって人間の歴史社会が成立するのであり、伝達の重要な medium が言語である限り、言語学はこの言語活動の主体的反省から出発し、多様な言語現象を具体的統一的に把握せんとする認識の過程であると云ってよい。

概念の記号体系として、思索と伝達に奉仕する言語は、現象としては多種多様であり、多くの異った国語が存在すると同時に各国語は夫々独自の音韻、統辞、意味の体系を保持しながら、歴史の中で変化していく。このような言語現象を対象として認識を作っていくためには方法的自覚が必要である。言語現象の如何なる側面を対象化し、如何なる方法でその対象に迫るかということである。しかし方法は対象を限定し、言語観によって規定される。言語観は学的認識の結果によつて豊かに肉づけられ発展していくものであるが、方法的自覚に先立って胚種 (rationes seminales) として言語体験の中にすでに潜在している。様々な言語学は夫々の方法によって作られたのであり、その方法の背後には夫々の言語観が潜在する。

言語観は、複雑多岐の言語現象を組織的統一的に把握せんとする認識の過程に於てその指導原理として要請される作業假説と云ってもよい。

## Ⅱ 言語観と方法

言語に関する認識はすべて具体的な言語体験から出発し又これに基づくものである。こゝでいま (hic et nunc) 言語体験の反省と分析によって、言語活動の主体としては、話し手又は書き手と聴者又は読者が考えられ、これら相互主体の間には表現と理解の関係が成立する。表現とは意識内容の言語記号への転換であり、理解とは言語記号の意識内容への還元である。これは相補的な作業である。

いまこゝで言語活動を営むものは個人であり、記号体系としての言語は個人と個人の協力によって創られて来たし、今もその創造は続けられているが、一度作られた作品としての言語は、作者から独立して歴史社会的な側面を獲得する。このような個人の外に存在する convention としての言語体系を学習することなしに言語活動は成立しない。又、何らかの理由で12~13才頃まで社会から隔離されたり、或は身体障害によって言語の学習を阻止された人々には、その実例が示す如く、思考能力の発達さえひどく阻まれる。然し、人間以外の動物に言語教育をいくら施してもごく初歩的な段階を出ない。従って、言語活動は人間の先天的言語能力 (competence) と後天的言語学習とによってはじめて実践 (perform) されるものである。言語学習とは換言すれば社会的訓練であって個の伝統への参加を意味する。然し言語活動を営む主体は個であって、伝達とは個と個との結びであり、話し手と聞き手という相互主体の共同作業によって成立するものである。その場合、個と個の結合の媒介となり、相互主体性を可能にする基盤は伝統であって、伝統は過去を現在につなぎ、現在を未来につなぐ動的な共同体意識でもある。

こゝで、言語活動を形成する三つの要素が考えられる。人類共通 (general) な先天的言語能力、伝統的約束としての特殊 (special) な言語記号体系、言語活動を営む主体としての個人 (individual) などであり、これらの中のどの要素を対象化するかによって異った言語観と方法が生れて来る。

ギリシヤ人に於ける logos は外に発言された言語を意味すると同時に、内なる言語、即ち思考能力としての理性を意味し、又万物の関係を支配する法則を意味した。言語は論理に密着していた。そこでは言語の一般的論理的側面、即ち類的側面が強調され、哲学的考察の対象となった。従って、言語哲学と一般文法の基礎はギリシヤに発する。

ユダヤ人に於ては、旧約の Babel の塔が物語る如く人類の言語は最初一つであったのに人間の hybris によって言語は分裂し意志疎通は不可能となった。この言語 (logos) はやがてヨハネ福音書の冒頭に示されている如く神的な啓示として登場し、ロゴスの位格としての受肉は人類の救済史の中で最も重要な出来事となる。同じく人類の立場に立ちながらもギリシヤ人の言語観が論理的哲学的であったのに比べてユダヤ人のそれは歴史的宗教的であった。中世に於ては、その普遍論争を通じて、realist と nominalist との間で言語観は存在論と絡み合つて夫々異つた姿をとる。ルネサンスから18世紀頃までは言語学は所謂 philology であり、文献学であった。言語そのものが独立した認識の対象として実証的に考察されるようになるのは18世紀末からである。

18世紀末に、Sir William Jones が印度で Sanskrit の文献を見出し、これをギリシヤ語ラテン語と比較することを試みてから、19世紀の言語学は印欧祖語の再建を旨とする比較言語学が主流となった。これは印欧民族の遠い過去への憧憬を含むロマン主義的史観に導かれて生れて来た言語観であり又方法であった。そこでは単一の印欧祖語が假定されていたが、多種類の国語が歴史的に考察され比較された。

19世紀の比較言語学のあとをうけて、言語活動の中に langue と parole の二要素を認め、langue を対象としてその共時的構造分析を始めたのは Saussure であった。こゝでは経験的特殊科学としての言語学の基礎が設定され厳密な記述と分析が実行された。方法的自覚は強化され、langage, langue, parole の概念が明白にされると同時に、通時と共時の方法が峻別され、Saussure の言語学は、langue を対象とした共時的構造の言語学として自覚された。langue とは“種”として歴史社会的約束として成立して来た概念記号の体系であって、個人を超えた社会的存在である。比較言語学がその方法としては通時を主としながらも、対象としたものは langues であった。従って19世紀比較言語学に於ても、又 Saussure 言語学に於ても、langue が中心であり、言語主体としての個人に対する社会集団の重さは大きい。言語活動に於ける個人的側面としての parole は Bally などによって対象化され文体論として発展する運命を担っていた。

一方、Pavlov の条件反省や behaviorism を背景として、出て来たのが Bloomfield などのアメリカ構造言語学である。この言語学の主要な傾向としては、言語活動の中で意識をのぞき客観的観察にたえ得る行動面を対象を限定し、内省的方法を排して実証的、実験的方法を進め、行動を stimulus の函数として捉えようとするものである。即ち言語現象を stimulus—response の図式に還元し、言語の本体としての話しことばを行動の様式と考える。stimulus—response の過程は反射的機械的に捉えられ、言語活動は与えられた環境の刺激に対する受動的適応と考えられている。そこでは刺激に対する判断力、環境に対する能動的な創造力が軽視されている。又行動に現れない人間内部の精神活動や意識の深層が度外視される危険がある。同一の刺激に対して異った反応を示す人間の内面的で独創的な個性は条件反射のメカニズムでは説明出来ないであろう。こゝで人間の先天的な言語能力 (competence) を performance の背後に假定し、言語の surface structure に対して deep structure を設定した Chomsky 言語理論の歴史的必然性が考えられる。一つの kernel を選択し、それを様々な言語表現に変形転換する先天的な言語能力を假定することによって Chomsky 理論は生産的なものとなった。然し言語の形象性のもつ直観の意味は概念に還元され得ない場合が多く、従って他の形式に変形転換出来ない。言語は rational な面と同時に感性的な面をもつからである。この点 Chomsky の合理的で deductive な方法の限界が克服されるべきであろう。

以上は簡単な言語学の歴史の素描であるが、すべての言語理論は言語体験の反省として出発し、そこには假説としてのなんらかの言語観、更にその背景として人間観や世界観が暗示されている。夫々の言語観と方法はその特色をもつと同時に一面的でもある。言語活動に於ける類 (genus)、種 (species)、個 (individual) の階層、又先天性と後天性、規範と創造的自由、演習と帰納、等々を動的に止揚統一し発展させる假説と方法は不断に要請されている。それに答える一つの試みとして、言語活動を意味の表現とその理解として捉え、更にそれを意味の生産とその再生産として比喩的に捉えることによって複雑多岐の言語現象の透

視図を作ってみたいのである。

### Ⅲ 理解の過程的構造

話し手、書き手は相手に理解してもらうことを期待し、聞き手、読み手は相手の意向を理解しようと努める。このような心的関係に於てのみ伝達と理解は可能となる。では理解しようと努めるとはどのようなことであろうか。それは話し手、書き手の performance としての言語表現を媒介として、本人の表現に到るまでの心的過程を模倣し追体験してみることであるが、言語は表現方法としては有限であるのに、人間の伝達したい意味内容は無限である。Chomsky はその “Aspects of the Theory of Syntax” (M. I. T. 1965) の序に於て、Humboldt の一句を引用しながら自らの見解をのべている。

“His view that a language ‘makes infinite use of finite means’ and that its grammar must describe the processes that make this possible is, furthermore, an outgrowth of a persistent concern, whithin rationalistic philosophy of language and mind, with this ‘creative’ aspect of language use.”

限定された ergon としての言語手段を自由に駆使することが言語活動であり、そこには無限とも云うべき表現と伝達の可能性が秘められている。しかし現存の言語による伝達は決して完全なすのとは云えず、無形の意味は言語表現によって限定されながらもこれを超えるので、その理解も多様となる。語や文の意味も文脈によって変化し、同一言語形式の多義性 (polysemy) や、異なる言語形式の同義性 (synonymy) の如き現象が屢々見られる。従って、禪の “不立文字” の思想が示す如く、外的表現形式としての文字に捉われていては、文字を超える言外の真意を悟ることは出来ないのである。

言語表現と意味の理解とは直結するものではない。表現は意味解釈を媒介として理解につながる。言語表現の背後には必ず主体の動機や意図があり、主題がある。surface structure を通じて deep structure に遡り、文の kernel に対する主体の intention を探ることが解釈である。しかし、主体の intention は普通かくされているのでこれを直接捉えることは困難である。意図と表現の間は、“black box” であつてこれを機械的、客観的方法で解明することは出来ない。表現以前の、又表現を超えた意味内容の把握のためには類推による追体験以外に方法はない。それは自己を空しくして相手の状況に身を置き、その言語過程を模倣追体験することであるが、それは又自らの言語体験の中に潜在する普遍的なものを見出し、その延長上に他の言語体験を反映せんとする作業とも云える。従って自らの全体験の範囲と深さは、その時点に於ける他に対する理解力と比例するものである。理解力は多くの他者との出会いを通じて普遍者への接近に応じて進展するものである。

### Ⅳ 解釈学と意味論

言語表現の理解は解釈を通じてなされるものであり、解釈は意味の探究である。解釈の不足、即ち読みの浅薄さから誤解が生ずると等しく、解釈の過剰、即ち読み過ぎからも誤解が生ずる。解釈は言語表現に即して忠実に進められるべきであり、同時に部分的語句に捉われ

て全体としての真意を見落してはならない。この意味で、解釈学は意味論の実践的適用に於ける重要な分野である。

Charles W. Morris はその著, “Foundations of the Theory of Signs” (Chicago, 1938) pp. 6-7. に於て the relations of signs to objects の研究を semantics, the relations of signs to signs を syntactics, the relations of signs to interpreters を pragmatics としている。これに従って意味の次元を分類するならば, (1) lexical meaning (2) syntactic meaning (3) pragmatical meaning とすることが出来る。然しこれらの意味層は, 実際の speech 又は文章に於ては互に絡み合つて全体としての意味を形成し, 表現主体の intention によって統一されている。言語表現の意味は, その構成要素である語句や文の意味の集積によって得られるものではなく, 表現の背後に潜在し, 全体を貫く主題にかゝわるものであり, 各部分はその主題との連関によってその生きた意味を獲得する。これを contextual meaning と呼んでもよい。文章の解釈は, この文脈の糸を捉え, これを辿ることによって始めて可能となる。‘to read between the lines’こそ解釈にとって必要なことである。これは, 直観と imagination を必要とする作業である。

文章の中で手懸となる key words を捉えることによって, 意味の中核を把握し, 意味構造を解明出来る場合もある。key words は作品の中で繰返し用いられる度数の如きものによって数量的に決定されるものではなく, 一度しか用いられなくても解釈上重要な手がかりとなる場合もあろう。それを見出すのは直観力である。いずれにせよ, 文章の意味はすべて有機的に統一され, 部分と部分は全体との連関によって contextual meaning を夫々獲得する。

例えば, Shakespeare の脚本 “Hamlet” の解釈は言語的意味の解明に基づくが, 逆に言語的意味も劇全体の関連の中で機能的, 有機的に決定される。主役 Hamlet の台詞の意味も, Hamlet の性格の解釈と深い関係を有するのであり, その性格の意味は劇全体の構造と合体しているのであって, 劇の story から離れてその性格を論ずべきではない。劇作 “Hamlet” は, その主役の独自の性格を作るために書かれたのか, 或は劇の story の展開のためにあのような性格を必要としたのか。もし, Hamlet が直ぐにでも仇討を実行するならばあの劇は成立しない。劇の成立には様々な葛藤が必要であり, Hamlet の性格の内部には Montaigne 流の scepticism, Oedipus complex, 罪の意識など行動を遅延させる要素が読みとられて来た。或は又, Hamlet は英国ルネサンス期の思想的 chaos を反映するものであろうか。尚又, Hamlet の中に普遍的人間の悲劇を見出すことも出来よう。Shakespeare は当時の自己の実生活との連関に於て Hamlet に自らの思想を代辯させようとした点もあるかも知れない。然し Shakespeare に作者としての意図を聞くことは出来ない。唯作品があるだけである。

言語表現は認知的な意味を情報として伝達する機能と, 感動を喚起する機能とを有する。emotive meaning は cognitive meaning と異って含蓄が深く, 比喩的暗示的であって, 多義的で曖昧である。これは, W. Empson が, “Seven Types of Ambiguity” や “The Structure of Complex Words” などで詩語を実例として詳説している如くである。

言語表現の意味探究の過程に於てはその曖昧性, 多義性を避け得ない。特にその比喩的, 情的意味の解釈に関しては, 作者自らが読者の想像力に委ねている場合もあり, liberty of interpretation は認められてしかるべきである。特に文学作品の場合は, 多くの解釈の夫々

の相対的正当性が主張されてよい。その場合、全体としての主題的意味の中核が直観的に把握される必要があると同時に、どこまでもテキストに即して厳密に文脈が辿られるべきであり、又その言語表現の歴史社会的背景との連関、読者との結びつき等の探究も解釈を進める過程で要求される。解釈は意味の再生産とも云えるが、部分的機械的になること、独断的読み込みとを共に避けなくてはならない。

言語表現の意味解釈の第一歩は、surface structure を deep structure に還元することであり、それは記号体系を意味体系に還元する作業でもある。意味体系とは意味連関である。意味の迷路に筋道をつけていくことが意味解釈である。表現以前の世界は無限定であり、無意識的でさえある。表現の主体は、表現することによって自らの内なる世界を自覚し、自らを理解する。主体は自らを理解することによって他者にも理解を求めるのであって、これが表現と伝達の内面である。

解釈は表現に於ける主体の理解を再理解することであり、表現主体が自らを理解していたよりも更によく主体の意図を解明し、主体が気付かなかった点をも明白にしてゆくことを目標とするものである。というのは、主体の意向とその performance との間には多少のずれの存在する場合が多く、解釈はその溝を超えるために、表現の出来ばえに関する批判をも必要とする。表現の意味がよく分らなかつたり、誤解されたりする場合、解釈上の不充分さと間違いによる以外に、表現そのものの不完全さと間違いによることもあるからである。

表現とは、表現内容の自覚と理解に密着している。主体の内容に対する自覚と理解の不足は、表現の不明と混乱を生む。本人がよく分つていないことを他に伝達することは不可能だからである。然し著者は半ば無意識的に表現の performance を実践することが多く、この場合表現に於ける無意識的なものを意識にもたらし、著者が表現したかった意味内容を著者以上によく理解せんとするのが解釈学の意図するところである。

言語表現はそれ自身としては記号体系であり、記号体系を意味体系に転換することが解釈であって、表現は主体の作り出したものであるから、表現の意味内容の理解は表現主体の意識内容の理解につながる。言語表現の意味を主体の側から考察するならば、I. A. Richards の述べる如く次の四つの側面が得られる。(1) what he says (Sense) (2) his attitude to what he is talking about (Feeling) (3) his attitude to his listener (Tone) (4) his intention, his aim, conscious or unconscious, the effect he is endeavouring to promote. (cf. Practical Criticism, pp. 181-182)

私見としては、(1)の意味は、更に literal と figurative とに分けられるが、言語表現に直接出ているものは(1)の意味であって、主体の feeling や tone は間接的であり、intention に到っては、表現の背後にかくされていることが多い。然しこの intentionこそ意味の最初と最後をつなぎ、全体をしめくゝるものである。主体の intention を捉えることによって、意味全体の中心と方向を測定出来るのであって、意味解釈のためには重要な手懸となることは明白である。主体の intention が、表現に於てどの程度実現されたかを判別することによって表現そのものゝ評価も可能となる。英語の meaning は動詞 mean から来る名詞であって、to mean = to intend なのである。

勿論、言語表現はひとたび仕上げられると、主体から離れて独立した社会的存在となる。そして他人や時代の解釈と批判に身をゆだねることになる。作品は客体として認識や解釈の対象とされ、語学的意味 (lexical-syntactic meaning) や歴史社会的意味の客観的学的探

究の対象とされる。作品の解釈はどこまでも言語表現そのものに即し、作品そのものから遂行されるべきであり、表現以前の主体の intention や表現主体の personality は、発生的で主観的意味をもつにすぎないとする考えもあり、これは W. K. Wimsatt などの所謂 “intentional fallacy” であるが、言語表現は存在としての面と機能的な面とを有し、主体は表現という社会的行為を通じて自らを眺める。表現に於ては、社会と実存、客体と主体は表裏一体をなして、これを分割することは出来ない。外面的意味と意図としての意味は絡み合い、表現に於ては、explicit meaning と implicit meaning は共存する。解釈とはむしろこの二つの面を結合することであり、それが理解への道である。

理解とは出会いでもある。言語表現に於ける sense, feeling, tone, intention の把握を通じ表現主体との出会いへの道を用意するのが解釈の仕事であり、理解とは、単なる客体的な認識を超えて、表現主体との全人間的交流と共感 (sympathy) を意味するものである。

## Summary

### Process of Understanding in Language —From the Semantic Point of View—

By Katsuo MOROZUMI

To understand the meaning of a certain linguistic expression is to encounter with the speaker or writer in the field of language. And hermeneutics, the science of interpretation, has the function of leading the hearer or reader to the understanding of speech or writings.

The end of linguistic expression is to transmit one's external or internal experience to others through language, so in order to understand some linguistic expression it is necessary to imitate or repeat the experience of the performer. But a language gives us only finite means though our experiences are infinite, so we cannot but make infinite use of finite means in linguistic expression. Therefore linguistic expression is more or less allegorical and ambiguous. In order to avoid misunderstanding it is necessary to interpret properly the implicit meaning of speech or writings.

We become conscious of ourselves through speaking or writing which gives appropriate forms to our thoughts or feelings which are often chaotic and formless before expressed.

According to I. A. Richards the meaning of linguistic expression consists of four aspects, viz. sense, feeling, tone, and intention. And sense has two aspects—literal and figurative. To grasp these aspects through semantic interpretation is to prepare the way to the understanding of linguistic expression. Misunder-

standing comes from the lack of interpretation or from reading into texts our own ideas or feelings.

In other words interpretation reduces linguistic surface structure to deep structure whose kernel is the intention of the performer.

The whole meaning of linguistic performances consists of many semantic elements which are contextual with one another and are integrated by the performer's intention. But in many cases the intention is hidden and the performer himself is often unconscious of his own intention.

Linguistic expression has its limit and cannot help being suggestive and of polysemy, so liberty of interpretation should be admitted in some degree.

But in order to avoid misunderstanding as far as possible not only sympathetic intuition but also hermeneutics, the science and method of semantic interpretation, will be demanded.

Hermeneutics is nothing but applied semantics, and is an effective medium to make possible the encounter between the speaker-writer and the hearer-reader in the field of tradition and transcendental apperception.

Mutual understanding through linguistic expression among human beings can be established only through the organic combination of individual, tradition based on special historical society, and humanity which should be universal in the world.